

東京家政学院大家政 ○川上 梅 松本 幸子

**目的** 身体計測は裸体に近い状態で測定することが原則とされているが、そのような状態になることが困難な場合も少なくない。また、衣服購入時には、着衣の上から計測する場合も多い。着用する衣服が身体を圧迫する場合には、身体周囲長が、裸体時の計測値よりも減少することが考えられるが、多くの場合、着衣により周囲長は増加する。本研究では、着衣により腰囲が増加する場合について、増加の要因を分析し、検討した。

**方法** 生体計測であるがゆえに生じる計測誤差をできるだけ排除し、純粹に着衣による増加を検討するために、まず「円筒モデル実験」を行い、次に「人台着装実験」を行った。

いずれの実験においても布の厚さとゆとり量の要因から増加量の検討を行った。特に、「円筒モデル実験」ではゆとり量の分散方法および円筒の太さの観点から、「人台着装実験」ではスカートとジーンズ着用時の腰囲について、縫製方法の観点から検討した。

**結果** 1. ゆとり部分は1箇所まとめて折りたたむ方法の増加量が最小であり、最良の方法といえる。 2. 増加量は布の厚さとともに比例的に増加し、また、ゆとり量とともに増大した。さらに、縫製の影響が大きく、縫製の影響がない場合には円筒の半径に比例して大きくなる傾向がみられた。したがって、布の厚さとゆとり率から推定される部分と、身体の太さ、衣服の縫製状態などが関係してくる部分とに分けて、増加量の理論値を求めることを提案した。